



これまで、道明寺地域の歴史についてさまざまな視点から見てきました。土師寺と呼ばれた道明寺のご本尊の十一面観音菩薩立像、菅原道真公が自ら作られたと伝えられ、試みの観音と称される十二面観音菩薩立像のお話をしました。また、道明寺に住んでいた道真公の叔母、覚寿尼と道明寺糰の起源にまつわる伝承についてもお話をしました。連載を振り返ると、あらためて、道真公と道明寺地域の歴史との深い縁を感じます。エピソードでは、道真公とゆかりの深い道明寺天満宮に残されている、道真公の愛したと伝えられる、国宝に指定された伝菅公遺品をご紹介します。

地で亡くなった道真公の遺言によって、道真公の叔母覚寿尼に届けられたと伝えられています。青白磁円硯(白磁円硯)、銀装革帯、玳瑁装牙櫛、牙笏、犀角柄刀子、伯牙弹琴鏡(高士弹琴鏡)の6点が国宝に指定されています。青白磁円硯は、外面にやや青みを帯びた白色の釉薬のかかる円形の硯で、直径27センチの大型のものです。もとは20本の脚によって支えられていましたが、現在は脚は失われています。唐の時代に中国大陸で作られたものです。銀装革帯は、2枚の革を縫い合わせたバンドです。銀メッキされた銅製の四角い飾りが15個着けられており、弓矢で狩りをする人や、鹿などが浮き彫りにされ、中央には水晶玉をはめ込んでいます。玳瑁装牙櫛は、前髪を飾る象牙製の櫛の長い櫛です。当時の男性は、冠

をかぶることがしきたりで、長い髪を頭上で束ねるために櫛は必需品でした。牙笏は、長さ36センチの象牙製の笏です。笏は、宮廷で貴族が手に持ち、式次第などを書き留めておくメモ用に使われたものです。雛人形の男雛をよく見ていただくと、手に笏を持っているのがお分かりいただけると思います。犀角柄刀子は、柄を犀の角でつくった小刀のことです。柄の縁には銀の金具がはめられています。

伯牙弹琴鏡は、銅製の八花形の鏡です。左側に竹林で琴を弾く中国古代の琴の名手伯牙が、右側には鳳凰が表現されています。

これらの品々は、道真公の遺品として、これまでの歴史の中で、さまざまな人々の手により、現在まで守り伝えられてきました。現在に受け継がれたこれらのものは歴史を語る貴重なものとして国宝に指定されていますが、同時に、それを守り伝えるために、各時代、さまざまな場面で関わった人々は、歴史の担い手として大きな役割をはたしてきたと言えるでしょう。

(文化財保護課 新開 義夫)

※白磁円硯、玳瑁装牙櫛、高士弹琴鏡は、大阪市立美術館で開催中の「日本国宝展」に展示されています。(6月15日(日)まで。)



▲「伯牙弹琴鏡」
(道明寺天満宮所蔵)



▲「青白磁円硯」
(道明寺天満宮所蔵)



道明寺の歴史を語る

6 エピソード